

教育現場での自己表現の実践に関する研究

—差別化戦略からみたフリートークの成果と課題—

大橋松貴

大月市立大月短期大学経済科 助教

1. はじめに

本研究は、公立短期大学の演習科目¹⁾で実施するフリートークの成果と課題について、差別化戦略の概念を用いて検討するものである。筆者の担当する2年次後期の専門演習では、前半にフリートークのプログラムが組まれている。フリートークは、1年次後期の専門基礎演習でも実施されているが、2年次では1年次のときよりもさまざまな面でハードルが高いものになっている。2年次も後期に入ると、進路が決定していない学生にとっては勝負の時期になる。そのため、そのような学生にとっては「話し方スキル」をさらに向上させ、進路に関わる面接に役立てることが重要になる。2年次のフリートークでは、それぞれの学生が「自分の特性をいかした話し方」を実践することに重きが置かれており、その意味において他者とは異なった、いわゆる「差別化」を図ることが重視されている。2年次のフリートークにおいてもこれまでの演習と同様、基本的な話し方スキルの習得を目指しているため、スキルの面で目新しい要素はそれほど多くはない。そうではなく、ここでは1年次、2年次とフリートークを複数回経験することであらわれてくる「自分の特性をいかした話し方」を実践できるようになることが主な目的になる。学生はフリートークを複数回経験することで、徐々にではあるものの、自分なりの表現方法を見つけ、実践できるようになっていく。このように自分の特性をいかした話し方は、他者との差別化を図ることにつながり、進路に関わる面接においても役立つと考えられる。

以上のことから、本研究では2年次後期の専門演習で実施するフリートークを取り上げ、その成果と課題について差別化戦略の観点から検討する。なお、前述した内容を踏まえ、ここでは取り上げるスキルについて、具体的に検討していく。

以下、本研究の構成について述べる。第2章では、先行研究を概観し、差別化戦略について確認する。そのうえで、本研究のコンテキストに沿う形で措定し、ここでの研究視角を提示する。第3章では、フリートークの基本ルールについて確認する。第4章では、フリートークの成果と課題について検

討する。第5章では、まとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究の概観

本章では、本研究のキー概念である差別化戦略について先行研究をもとに確認する。そのうえで、本研究のコンテキストに沿う形で措定し、ここでの研究視角を提示する。

2年次後期の専門演習では、前半にフリートークが課せられている。1年次後期の専門基礎演習においてもフリートークは課せられているが、2年次ではよりハードルが高いものになっている。これは、短期大学という限られた期間で、1年次、2年次、それぞれの学年においてフリートークを経験することでさらなる「人前で自分の思いや考えを適切に伝える」スキルを身につけてもらうことを目的としているためである。このように、学生はフリートークを複数回、経験することで「他者とは違った強み」を得る可能性が高くなる。そのため、ここでは差別化戦略に関する先行研究を概観し、ここでの研究視角を提示する。

差別化戦略は、ポーターにより提唱された概念である²⁾。ポーターは、差別化戦略を「自社の製品やサービスを差別化して、業界の中でも特異だと見られる何かを創造しようとする戦略」³⁾であるとしている。本研究のコンテキストに沿っていえば「専門演習でフリートークを経験することで、学生が自分の特性をいかして『人前で自分の思いや考えを適切に伝える』スキルを習得し、それぞれの進路に役立てること」ということになる。ここでは差別化を「学生が自分の特性をいかした伝え方を実践すること」ととらえている。専門演習では、基本的な話し方スキルの習得を目的にしているが、その表現の仕方は学生により異なる。また、現実的にすべての話し方スキルを習得するのは困難であり、学生によって得意・不得意などの傾向はみられる。そのため、学生が実践する「話し方スキルの組み合わせ」もまた、個人レベルで異なる。このように、学生が自分に適した話し方スキルに気づき、実践できるようになるには経験を重ねることが必要になる。その経験

表1. フリートークの基本ルール(専門演習)

<p>発表時間 発表時間：5分 質疑応答：10分 ※発言者は面接を想定した質問をすることが望ましい。 ※ペアの人が発言チェックをすること。 ※発表者が言葉に詰まったときには、フォローすること。 教員コメント：10分</p>
<p>発表方法 ペアを組んで発表する。 1人が発表、もう1人はサポート担当(スライド変更)。 各回、2人(1ペア)が発表する。 発表内容：各自が自由に研究テーマを設定 発表方式：企業プレゼン方式 ※希望者は、それぞれの進路(編入、就職)に関わる模擬面接を想定してプレゼン資料を作成してもよい。 ※ただし、資料はフリートークを行うということを前提に作成すること。</p>
<p>発表条件 発表者はスクリーン⁴⁾をみず、フロアの方を向いて話すこと。 ペアの学生は、スライドを変えるタイミングやアニメーションなどの動きを発表者とともに事前に練習しておくこと。 ※本番ではアイコンタクトは使えない。</p>

※当該表は筆者が作成。

を演習という場で得ることで、学生は「より独自性の高い話し方」を実践できるようになると考えられる。

以上の内容を踏まえ、本研究では2年次後期の専門演習で実施するフリートークを取り上げ、その成果と課題について検討する。

3. 事例概要

本章では、フリートークの概要について確認する。具体的には、フリートークの基本ルールについてみていく。2年次のフリートークでは、それぞれの学生が自由なテーマを設定して実施する。このフリートークでは、希望者はそれぞれの進路(編入、就職)に関わる模擬面接を兼ねるものとして活用することができる。具体的には、編入希望の学生であれば志望理由書などに書く内容を、就職希望の学生であれば自己PRなどの内容について話すということを選択してもよいということである。なお、表1はフリートークの基本ルールを示したものである。

まず、発表時間である。これは、1年次からの個人発表⁵⁾の時間を考慮して設定している。一般的に、発表時間が長いほど難易度は上がるため、発表者は聴き手に対し、より論理的にかつ分かりやす

く(伝わりやすく)話さなければならなくなる。1年次後期の専門基礎演習では、最初の自己紹介が1分、フリートークが3分に設定されている。この流れを受け、2年次に実施するフリートークは5分間としている。5分間発表するということは、自分の伝えたいことをある程度整理し、ストーリーをつくったうえで「自分の言葉」を用いて発表する必要がある。このような話し方スキルは進路の方向性(編入・就職)に関係なく、面接(特に予測可能な質問に対応する場合)において重要なものになる。それは、面接の場において面接官から事前にある程度予想していた質問が投げかけられたとき、この「自分の伝えたいことをある程度整理し、ストーリーを組み立てたうえで『自分の言葉』で発表する」能力が役立つと考えられるためである。

次に、発表方法と発表条件である。2年次に実施するフリートークは1年次のものとは異なり、ほかの学生とペアを組んで発表する。発表方式は、企業などが新商品をマスコミ向けに発表するようなスタイルを想定している。このような発表方式では、フロアはスクリーンと発表者(話し手)に目を向けることになる。そのため、発表者はフロアに対し、堂々と発表することが求められる。ここで重要な

表2. フリートークの成果と課題(2年次)

	成果	課題
フリートーク	<ul style="list-style-type: none"> ・トーク・マネジメント ・スクリーンをみずに話す ・直接的話し方スキル ・しっかりと滑らかに話す ・間接的話し方スキル 表情と空気感 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的話し方スキル 基本要素の底上げ 声の大きさ ・間接的話し方スキル 言葉詰まりと不自然な行動 ・アクション⁸⁾の少なさ
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> ・フロアに対するリアクション ・アクションの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・語尾の表現方法 「堅さと強さ」 「語尾の伸び」
共通事項	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔のメリハリ 	<ul style="list-style-type: none"> ・フロアに対する言葉のフォロー

※当該表は筆者が作成。

るのがベアの存在である。ベアの学生はスライドを変えるタイミングやスライドに設定されたアニメーションの動きなどの各種作業を「発表者とアイコンタクトを取ることなく」行わなければならない。教員がこのルールを設定した理由は、発表者側が「スクリーンに頼らず、自分の頭のなかにある情報だけを用いて、論理的に話す」という経験を積んでほしいためである。この条件下では、発表者はスクリーンをみずにフロアに対し、「自分の言葉で」わかりやすく話さなければならない⁶⁾。これについても発表時間のもと同様、面接時において「ある程度、予測可能な質問」に答えるためのトレーニングになると考えられる。

具体的には、編入組には「希望する大学の志望動機や志望理由」、「短大での学びと希望する大学の学びとの関連性」、「大学を卒業したあとの将来的な目標」などが、就職組には「企業への志望動機や志望理由」、「自己PR」などが該当すると考えられる。当然のことながら、面接ではすべての質問が予測不可能なものであるというわけではなく、事前にある程度予測できるようなものもあることが想定されるため、このような状況下で発表することは重要であるといえる⁷⁾。

4. 事例分析

本章では、専門演習で実施するフリートークの成果と課題について確認し、検討する。表2は、フリートークの成果と課題を示したものである。なお、ここではフリートーク(発表)と質疑応答、共通事項(フリートーク〔発表〕／質疑応答)の3つに分類し、論を進めていく。

4.1 フリートークの成果と課題

本節では、フリートークの成果と課題についてみていく。前述したように、ここではフリートークの発表に焦点をあてていく。

4.1.1 フリートークの成果

ここではフリートークの成果について確認し、検討する。具体的には、「トーク・マネジメント」、「スクリーンをみずに話す」、「直接的・間接的話し方スキル」についてみていく。

トーク・マネジメント—自分でテーマを決め、わかりやすく伝える—

2年次のフリートークは1年次のときとは異なり、スクリーンを使用できるものの、発表者はそれをみることなく、フロアの方を向いて「自分の言葉」で発表しなければならない。そのため、より高いレベルでの対応力が必要になる。学生は5分という限られた時間で、自分の伝えたいことを決め(テーマ設定)、フロアにわかりやすく伝えるようにストーリーを組み立て、実践する必要がある。ここでいう「ストーリー」とは、「事前に話の大まかな流れを頭のなかに入れ、その流れに沿ってわかりやすく伝える」という一連の流れのことをさす。

ここで、注意しなければならないことは「話の流れは大まかである」とこと、「話の内容は現場のなかで、その都度変化させていく」ということである。前者は、あらかじめ綿密に台本などをつくりこむことはせずに、流れに幅をもたせるということである。これにより、発表者がフリートークを実践す

るなかで「内容を少し変更したい」と思ったときに、すぐに変更できるようになる。このように話の流れに幅をもたせることで、発表者は「(必要であれば)いつでも発表内容を変更できる」という気持ちを抱きやすくなり、精神面においてもよい効果があると考えられる。

後者は、実際にフリートークを実践しているときに「自分の話が相手にわかりやすく伝わっているのか」という自分視点の考えだけでなく、「自分の話に対して、相手はどのようなリアクションや空気感をだしているのか」という相手視点の考えも踏まえながら、話の内容を臨機応変に変化させていくということである。このように相手の側に立って話すスキルは、フリートークに限らず、進路に関わる面接やそのほかの社会人としての生活全般においても必要なものである。2年次に入り、多くの学生がフリートークにおいてこれらの点を改善していくようになる。

スクリーンをみずに話す—何もみずにフロアの方だけに向けて、話す—

前述したように、2年次のフリートークでは、大半の学生が基本ルールである「スクリーンをみずに話す」ことができるようになる。これは、これまでの演習で学生自身が「自分の言葉で話す」経験を重ねてきたためである。演習を通して、教員は学生に「自分の言葉で話すこと」を繰り返しアドバイスしている。「自分の言葉で話す」ことで、話の大まかな流れを頭のなかに入れつつ、具体的な発表内容は現場の状況(フロアの反応など)を踏まえ、臨機応変に対応することができるようになる。それができれば、自然とスクリーンへの依存度が下がり、最終的には何もみずにフロアの方を向いて話すことができるようになる。当然のことながら、このスキルはすぐに身につけることができるものではないため、ここでのフリートークで「完全に何もみずに発表する」ことを実践するのは難しい。ただし、教員としては、学生に「何もみなくても、ある程度は自分の言葉で発表できる」ことを目指してほしいとの立場であるため、ここでは「スクリーンをみずに話す」というルールを設定している。

実際、フリートークの回数を重ねていくと、学生の「スクリーンをみずにフロアの方を向いて話す」姿勢がより強く表れるようになる。このように、フ

ロアの方を向いて話すことができるようになると、自然と周り(フロア)を見渡せるようになり、会場全体の状況把握もしやすくなる。そのため、より環境に適した話し方ができるようになる。ここでいう「環境に適した話し方」とは、会場の大きさやフロアの反応といったものである。前者は、主に声の大きさやトーン、スピード、抑揚など「声」に直接関連するものである。後者は「フロアが興味深く聴いているか、そうでないか」などを把握し、それに対応した話し方をすることである。フリートークが進むにつれ、徐々にではあるものの、学生はスクリーンをみずにフロアの方を向いて話すことができるようになっていく。

直接的話し方スキル—しっかりと滑らかに話す—

ここでは、直接的話し方スキルのうち、「しっかりと滑らかに話す」ことについてみていく。学生のなかには、アナウンサーのようにしっかりとした話し方を実践する者もいる。2年次後期の段階でこのような話し方を実践するということは、そのやり方が当該学生に適している可能性が高い⁹⁾。このように、しっかりと話す傾向が強くみられる学生は、1年次からこのようなスタイルであることが多く、ここでの「発表者側で内容を決めることができる」フリートークという場において、そのスタイルが当該学生に適していることがより明確に表れると考えられる。最終的には、さまざまな話し方を状況に応じて「臨機応変に」変えることができるのが理想ではあるが、現時点では「自分に適したスタイルをさらに改善していく」ことが重要になる。学生時代には、自分に適したスタイルを発見し、身につけること。そのうえで「プラスアルファ」として、さまざまなスタイルを少しずつ身につけていけばよい。

また、2年次に入ると、多くの学生が滑らかに話すことができるようになる。これは、これまでの演習科目のなかで何度も人前で話す経験を重ねてきていることや、自分の研究をより深いレベルで理解できるようになることなどが大きく影響している。これまでは、人前で話すことそのものに緊張していたり、自分の研究への理解度も低いため、話すときに「小さな間」などが多くうまれ、ぎこちなくなる傾向がみられていた。この時期に入ると、全体的にそのような傾向は改善されていくため、学生はより自然体で話すことができるようになっていく。この

ように、自然体で話すことで個性を表現しやすくなり、よりフロアを惹きつけることができる可能性が高まると考えられる。

間接的話し方スキルの成長—表情や空気感を活用する—

2年次後期に入ると、少しずつではあるものの、発表中に「明るい表情や空気感」を適切なレベルで表現することができる学生が増えてくる。これは、学生がこれまでの演習での経験から、話し方そのものである「直接的話し方スキル」だけでなく、表情や空気感などの「間接的話し方スキル」も重要であることを皮膚感覚で感じるようになるためである。

前述したように、2年次のフリートークのルールはこれまでの発表よりも厳しく設定されているが、それに関わらず、多くの学生が表情や空気感について一定レベルの表現ができるようになっていく。表情や空気感を適切なレベルで表現することができれば、面接の際、面接官の心象がよくなり、受験者(学生)の発言を前向きにとらえてもらいやすくなる。このように、間接的話し方スキルにおいても直接的話し方スキルと同様、厳しいルール下においても一定レベルのパフォーマンス¹⁰⁾を發揮できる学生が増える傾向にあるのは、学生自身がその重要性を皮膚感覚で実感するようになることが大きく影響していると考えられる。

4.1.2 フリートークの課題

ここではフリートークの課題について確認し、検討する。具体的には、「直接的・間接的話し方スキル」、「アクションの少なさ」についてみていく。

直接的話し方スキル

ここでは、直接的話し方スキルのうち、基本要素の底上げと声の大きさについてみていく。

基本要素の底上げ—基本の話し方をもう一度見直す—

2年次に入ると、学生の話し方スキルが全般的に向上するようになる。ただし、本演習で実施するフリートークは1年次のときよりも厳しいルールであるため、話し方スキルにおいても課題がみられる。ここでのフリートークのルールを厳しくしているのは、学生が進路に関わる面接を受ける時期に入ると

め、より実践的なレベルを想定しているためである。教員としては、これまで実践してきた話し方がどの程度通用するのかを試す場として活用してほしいという思いがあるため、このようなルールを設けている。

本演習でよくみられる学生の話し方スキルの課題としては、(1)早く話しすぎる、(2)暗記感がでて、(3)笑顔が少ない、(4)目線が不自然に動くといったものである。これらの現象が起きる主な要因は「緊張」である。これまで、自分の思いや考えを適切に伝えることができていた学生であっても、フリートークではこれらの課題がみられることがある。これは、2年次のフリートークでは、はじめて「単独」かつ「何も使わず(みず)」に発表することになるため、緊張感が高まることが要因にある。当然のことながら、面接では演習のときよりも緊張することが想定されるため、学生はここでの「緊張する」という経験をいかし、基本的な話し方スキルをもう一度見直すことが重要になる。

声の大きさ—緊張状態のなかで、「腹をくくる」重要性—

演習に参加している学生のなかには声小さく、相手に話の内容が伝わりづらくなってしまふ者も一定数存在している。そのような学生は、「もともとの自分の話し方(声の大きさなど)を意識的に変えることが難しい」、「緊張から、意識的に相手に余裕をもって聴いてもらえるだけの声のボリュームを維持して話すことが難しい」などの理由により、改善が難しい状況にある。そのような場合、学生によっては、無理に大きな声をだそうとはせずに「今、だせる声で、丁寧にゆっくりと、そして『相手に伝えよう』という気持ち強くもつこと」も大切になる。つまり、「声の大きさだけでなく、目線や表情、空気感」など、フロアに訴えることができるものをできる限り活用し、総合的に伝えるということである。このように、声の大きさを改善することが難しい学生は、無理に大きな声で話そうとするのではなく、「相手にしっかりと自分の思いや考えを伝える」という気持ちをもちながら、総合的に伝えるトレーニングを重ねていくことが重要になる。

間接的話し方スキル

ここでは、間接的話し方スキルのうち、言葉詰ま

りと不自然な行動についてみていく。

言葉詰まり—相手に悟られないようにするには—

発表中に言葉に詰まることの多い学生は、事前に台本をしっかりとつくり込み、練習を重ねて本番に臨むというスタイルを1年次から続けていることが多い。前述したように、この時期までそのようなスタイルを続けるということは、そのスタイルが「その学生に適している」可能性が高い。このように、学生にとって「自分に適したスタイル」を演習という場で発見すること自体はよいことである。ただし、このスタイルには課題もある。それは「発表内容が緻密に練られ、構成されているため、その内容を臨機応変に変えることが難しくなる」ということである。ここでいう「臨機応変に変える」ということは、アドリブで対応することを意味する。アドリブを用いて対応することは「応用レベル」に近いスキルであるともいえ、実践することは困難であるともいえる。実際の発表の場で言葉に詰まり、沈黙してしまうと、フロアからすればその時間は実際の時間よりも長く感じやすくなる。これは、実際の面接でもあてはまることであり、受験者である学生は、試験官からの質問に対して沈黙することを避けなければならない。そのため、このような課題を抱えている学生にとっては「大まかな内容を言えるようにすること」が大切になる。これにより、大まかな内容は台本(想定していたもの)と同じではあるが、細かいところについては臨機応変に話すことになる。そのような目的をもって練習を重ねていけば、実際の面接においても、自分の空気感で話すことができるようになり、言葉に詰まることが少なくなると考えられる。

不自然な行動—相手に動揺をみせないようにするには—

演習に参加している学生全般にいえることであるが、程度の差こそあれ、うまく言えないときや何を言っているのかわからなくなってしまったときに、不自然な行動を起こす学生が一定数存在する。このときの行動パターンは、学生により異なる。机に手を置き、そわそわしたり、目線をあちこちに動かす者など、その動きは学生によりさまざまである。実際の面接において、不自然にみえる動きは面接官の心象を悪くする可能性がある。なぜなら、不自然な動きは面接官からすれば受験者が自信をもっていな

いように受け取られてしまいかねないためである。そのようになることを防ぐために、不自然にみえるような動きはなるべくしないようにする必要がある。この点については、個人レベルで改善することが難しいものでもあるため、他人に確認してもらい、その都度「どのように動いているのか」、また「どうすればいいのか」といったことについて、意見をもらうなどの方法が有効である。

アクションの少なさ—発表のときの「動き」を有効に活用する—

発表時のアクションは、多くの学生が苦手とする要素である。これとは対照的に、質疑応答時には多くの学生がアクションを活用する傾向がみられる。発表時においてアクションを活用する学生が少ないのは、「発表の方に気をとられてしまい、アクションにまで意識が向かない」、「発表のときに緊張してしまい、アクションをする余裕がない」という理由によるものが多い。これらのことから、短期大学の演習という限られた期間のなかで、発表時にアクションを活用することは、学生にとって難しい課題であるといえる。その一方で、低い割合ではあるものの、アクションを活用できている学生がいるのも事実である。そのため、時間をかければ(全員ではないものの)一定数の学生は、将来的にはアクションを活用した発表ができるようになると考えられる。発表時に限らず、将来的にプレゼンなどを実施するとき、アクションを活用できるようになるためには、普段から身振り手振りなどの動きを意識的に行っていくことが必要になる。

4.2 質疑応答の成果と課題

ここでは、2年次のフリートークにおける質疑応答の成果と課題について、発表者の側からみていく。

4.2.1 質疑応答の成果

ここでは質疑応答の成果について確認し、検討する。具体的には、フロアに対するリアクション、アクションの活用についてみていく。

フロアに対するリアクション—フロアへの気遣い—

2年次の前期までは、フロアからの質問に対して一定のリアクション(あいづちや小さなうなずきなど)を取ることができる学生は少数である。これに

対し、2年次の後期では、大半の学生がフロアにとって「受け入れられやすい」形でのリアクションを取ろうとするようになる。ここでいう「受け入れられやすい」とは、相手にとって自然にみえる動きを取るということである。前述したように、2年次の前期までは、このようなリアクションを取ることができている学生は少数である。事実、学生の多くはリアクションには意識が向いているものの、必要以上に大きなあいづちやうなずきなどを行うこともあるため、ある種「不自然にみえる」ことがある。このように、フロアから自然にみえるリアクションを取ることは困難ではあるものの、多くの学生は経験を重ねるごとに改善していくようになる。フリートークの前半では、学生のフロアに対するリアクションが徐々に自然にみえるレベルにまで向上するようになる。そして、後半に入ると、多くの学生が適切な動きを伴ったリアクションを取れるようになるため、全体レベルでのフロアに対するリアクションは向上する傾向にあるといえる。

アクションの活用—自分の言葉に気持ちなどの「感情」を込める—

アクションを活用するということは、「(程度の差はあれ)動きながら言葉を発する」ということである。アクションを活用することには、言葉に気持ちなどの感情を込めやすいというメリットがある。2年次の後期に入ると、質疑応答のときにアクションを活用して話すことができる学生が増えるようになる。そうすると、前述したように言葉に気持ちなどの感情を込めやすくなるため、フロアにも発表者の熱量が伝わりやすくなる。そのため、フロア側からすれば「自分の質問にしっかり答えようとしてくれる」と感じやすくなり、発表者とフロアとのコミュニケーションがよりよいものになると考えられる。

また、アクションを活用することは、表現の幅が広がるということでもある。同じ内容を伝えるにしても「言葉だけ」の場合と、「アクションを活用したうえでの言葉」ではフロアに伝える情報量が大きく異なる。たとえば、発表者にとって、フロアに強調したい内容があるときに言葉だけで伝えるときと、力強いアクションを踏まえて伝えるときとは相手に伝わる度合いが大きく異なる。このように、アクションを活用することで、多くの情報を伝える

ことができるなどのメリットがうまれる。そのため、アクションを活用することは、発表者の回答レベルそのものを向上させるだけでなく、フロア側との円滑なコミュニケーションを実現しやすくなるという点においても重要であるといえる。

4.2.2 質疑応答の課題

ここでは質疑応答の課題について確認し、検討する。具体的には、語尾の表現方法¹¹⁾についてみていく。

語尾の表現方法—「堅さと強さ、そして伸び」—

多くの学生にとって、語尾を適切に表現することは難しい。本演習では、語尾の「堅さと強さ」、「伸び」において課題がみられることが多い。そのため、ここではそれらの点についてみていく。まず、「語尾の堅さと強さ」である。これは、ハキハキと話す傾向にある学生に多くみられる特徴である。語尾をはっきりと言いきってしまうと、「堅さや強さ」を過度に表現してしまうことになるため、多少は穏やかな要素も入れながら発言することが必要になる。ただし、その程度を掴むのは困難である。そのため、語尾の「堅さや強さ」という点を改善するには、経験を重ねていくなかで「自分なりの語尾の表現」を掴んでいくことが必要になる。本演習では、多くの学生が語尾の重要性について認識しており、その点においてはある種の「成果」ととらえることもできる。

そのほかにも、「語尾が伸びる」学生も一定数存在する。これについても、学生にとっては改善することが難しいものである。語尾が伸びると、聴き手側は「だらけていたり、緊張感が欠けている」といった印象を抱きやすくなる。そのため、語尾が伸びるクセについても改善する必要はあるが、一方で「意図的に語尾を伸ばす」ことが必要になることもある。その理由は「意図的に語尾を伸ばすことで、次に話す内容を考える時間を捻出する」ことができるためである。発表であれ、質問に答えるときであれ、発表者自身が話す内容を整理できていないケースもある。そうであっても、発表者は話す内容を整理し、フロアに適切に伝えなければならない。そのようなとき、意図的に語尾を伸ばして考える時間を捻出する必要性が生じることもある。ただし、ここで気を付けなければならないことは「フロアに語尾

を不自然だと思われぬようにする」ということである。語尾を不自然に思われるレベルで伸ばしてしまうことは、前述したように相手に「だらけていたり、緊張感が欠けている」といった印象を抱かれてしまいやすくなる。そのため、発表者はフロアに不自然に思われぬ範囲で、その都度、語尾を臨機応変に変化させていくが必要になる。

4.3 共通事項の成果と課題

ここでは、共通事項(フリートーク〔発表〕／質疑応答)の成果と課題についてみていく。

4.3.1 共通事項の成果

ここでは共通事項の成果について確認し、検討する。具体的には、笑顔のメリハリについてみていく。

笑顔のメリハリ—区切りで大きな笑顔をみせる—

2年次に入り、多くの学生は笑顔にメリハリをつけることができるようになる。2年次のフリートークでは、主に「自分の発表の最後」、「質疑応答でフロアからの質問に答えた後」にみせることが多い。まず、前者である。これは、自分の発表がこれで終了したことを暗にフロアに示す意味合いが大きいものである。発表の最後に大きめの笑顔をフロアにみせることで、フロアも発表者によい印象を抱きやすくなる。発表だけでなく、進路に関わる面接のときにもこの「最後の笑顔」は、相手に対しよい印象を抱いてもらいやすくなる。なぜなら、人間は最後の印象(ここでのケースでいえば「笑顔」)が脳裏に残りやすいと考えられるためである。そのため、発表の最後に相手に「笑顔」をみせることは重要な意味をもつ。

次に、後者である。これは、フロアからの質問に答える際にみせるものである。ただし、ここで注意しておきたいことは、発表者に対し、フロアから投げかけられた質問の数によって「大きな笑顔」をみせるタイミングが異なる可能性があるということである。これについては、「ケースバイケース」であると考えられ、一概にどれがよいとはいえない。その点を踏まえ、ここでは筆者が担当する演習での「タイミング」のとらえ方について述べる。

本演習では、基本的に「1人につき1回以上の発言」を課している¹²⁾。実際には、フロアからの同一人物による質問は2つ以上になることもあるが、多

くの場合、質問は1つである。このように、「1人につき1回の質問」がなされる可能性が高い場合、発表者はその質問に対する回答が終わったときに「大きな笑顔」をみせることになる。この場合、発表者はフロア全体に対し「『1人=1つの質問』に対し、お答えさせていただきました。」という意味を暗に示すことになるため、相手側も気持ちよく質問を終えることができ、次の学生が質問しやすい空気(タイミング)がうまれやすくなる。

次に、発表者がフロアから複数の質問を投げかけられる場合である。この場合、フロアの側にも発表者に対する配慮が必要になる。ここでいう配慮とは、質問する前に「それでは、2点質問させてください。1点目は～です。また、2点目は～です。よろしくお願いたします。」など、発表者側にあらかじめ「質問をいくつするのか」を伝えておくということである¹³⁾。このように、事前にフロアが発表者に質問数を伝えておけば、発表者も最後の質問に回答するときに「大きな笑顔」をだしやすくなる。このように、発表者にはフロアへの配慮を考えつつ状況に応じて臨機応変に対応することが求められる。

4.3.2 共通事項の課題

ここでは、共通事項の課題について確認し、検討する。具体的には、フロアに対する言葉のフォローについてみていく。

フロアに対する言葉のフォロー—フロアに「適切な声かけ」をする—

2年次に入り、フリートークにおいてもさまざまな面でパフォーマンスの向上がみられるようになる。そのため、発表者のフロアに対するリアクションについても、全体的にパフォーマンスが向上するようになる。ここでいうリアクションとは「自然な形でのあいづちやリアクションを取る」というものである。これに加え、重要になるのが「フロアに対する適切な声かけ」である。これは、フロアが質問する際、発言内容がわからなくなるような状態に陥ったときに、発表者が「フロアが自分自身の意見を整理し、そのうえで質問できる」ようにフォローするということである¹⁴⁾。

フロアは発表者に質問する際、「〇〇さんの発表のこういうところが面白く、大変勉強になりました。」など、質問するまでに敬意を示す前置きの言

葉を設ける場合がある。このようにフロアが発表者に対し、敬意を示すこと自体はよいことである。ただし、このような敬意を示す言葉を最初に伝えることで、かえって次に話すべき質問の内容を忘れてしまったり、どのようにして伝えたらよいか混乱してしまう場合もある。これは、一時的に「最初に発表者に対して敬意を伝える」ことに意識が向いてしまい、そのあとの質問内容にまで気が回らなくなってしまうためである。この場合、発表者はフロアの方が「完全に沈黙する」、「質問内容が整理しきれていないまま話す」ときでは異なる対応を取る必要がある¹⁵⁾。

まず、前者である。この場合、発表者はフロアが何を質問したいのかわからない状況にある。そのため、発表者側は「大丈夫です。落ち着いてゆっくり考えてみてください。」など、相手を精神的に落ち着かせるような声がけをすることが重要になる。このような状況下では、フロア側は「はやく質問しなくては」と思い、精神的に不安定な状態に陥りやすくなる。そうすると、質問内容が整理しきれていない状態で言葉を発することになるため、発表者やほかのフロアにも質問内容が伝わりづらくなる。このような状況に陥るのを防ぐには、発表者側でフロアを落ち着かせ、適切な質問ができるようフォローすることが重要になる。

次に、後者である。この場合、フロア自身が質問内容を整理しきれていない状態で発言している状態にある。そのため、発表者側で「フロアの発言内容から、『質問したいであろう事柄』を推測し、それを提案する」ことが重要になる。具体的には「○○さんの質問したいことはこういうことですか？」などの声がけをするということである。このとき、重要なことは「完全にフロアの質問(もしくは質問したいであろう内容)を提案する必要はない」ということである。当然のことながら、フロアが質問したいことは本人にしかわからない。ここで重要なことは、発表者がフロアに対し「一緒に質問内容を確認しませんか」という意思表示をするということである。発表者からこのような声がけをされると、フロアからしても「一緒に考えてくれている」と思うことができ、落ち着いて質問内容を整理しやすくなる。このように、前者、後者どちらの場合であっても、発表者はフロアに対して適切な声がけを行うことが重要になる。2年次のフリートークでは、この

レベルでの声がけを実践できている学生は少数である。ただし、このリアクションはフロアの側に立ったものであり、実践することが難しい、いわば「プラスアルファ」的なものである。そのため、このレベルのリアクションは、将来的にさまざまな経験を重ねるなかで、少しずつ身につけていけばよいと考えられる。

4.4 小括—フリートークの成果と課題についての整理

ここでは、フリートークの成果と課題について整理する。具体的には、フリートークと質疑応答、そしてそれら両方に共通する事項について確認する。最初に、フリートークの成果と課題についてみていく。

4.4.1 フリートークの成果と課題についての整理

2年次のフリートークでは、主に形式面や間接的話し方スキルにおいて成長がみられるようになる。ここでいう形式面とは、「トーク・マネジメント」や「スクリーンをみずに話す」、「しっかりと滑らかに話す」ことであり、間接的話し方スキルとは「表情や空気感」のことをさす。まず、前者である。ここでいうトーク・マネジメントとは、フリートークのテーマを各自で決め、臨機応変に話の内容を変化させていくということである。人前で話すときに、フロアの反応をみながら話の内容を変化させることは重要である。人前で話すときには、独りよがりの話し方をすることは避けなければならない。話すという行為は、聴いてくれる相手(フロア)がいて成立するものである。人前で話すことで、フロアの反応をダイレクトに感じることができるようになる。学生は、1年次後期からこのような経験を重ねてきているため、フロアの反応を察知し、それを話の内容に反映させていくことができるようになる。また、それと関連しているのが、「スクリーンをみずに話す」ということである。フロアの反応に意識が向くようになると、自然とスクリーンをみずに話せるようになる。1年次のフリートークでは、「何を、どのように話せばよいのか」という発表者視点を重視した話し方をする傾向にある。これに対し、2年次に入ると、フロアの反応をみながら話せるようになる。相手側の視点を意識しながら話せるようになる。そのほかにも、「しっかりと滑

らかに話す」という直接的話し方スキルにも成長がみられるようになる。これは、直接的話し方スキルのなかでも形式面(スタイル)が強く表れるものである。学生は自分に適した話し方をみつけることができ、なかにはアナウンサーのような話し方を実践する者もでてくるようになるなど、「話すことそのもの」への意識が高まっていく。また、これまでの演習での経験から、人前で話すことに慣れたり、自分自身の研究への理解が深まることなどから、多くの学生が「よどみなく滑らかに話す」ことができるようになるため、その点においても成長がみられるようになる。

次に、後者である。前述したように、1年次では「フロアがどのような印象を抱いているのか」というところにまで意識を向けることのできる学生は少ない。これに対し、2年次に入るとフロアの反応をみて、それに応じて話し方を変えられることができる学生が増えるようになる。実際には、話し方だけでなく「表情や空気感」といった間接的話し方スキルについても成長がみられる。いうまでもなく、人前で話すときに表情や空気感といった要素は重要になる。たとえ、話している内容がよいものであっても、話し手の表情が暗かったり、過度に緊張していることがわかるような空気感をだしている、相手側はマイナスのイメージを抱きやすくなる。逆に、話している内容に少し矛盾があったり、かみ合わないところがあったとしても、明るい表情で、前向きな気持ちをもって話すことができれば、そのような空気感が自然にできるようになるため、相手側の心象はよいものになりやすい。1年次の段階では、人前で話す経験が少なく、自分自身の研究についての理解も浅いため、表情や空気感にまで意識を向けることのできる学生は少ない。ただし、このときの経験を通して、少しずつではあるものの、学生は「聴き手にみられる」ことを意識するようになる。そのため、2年次後期の段階になると、そのような意識が表情や空気感の改善につながっていくのである。

フリートークでは、これらの成果がみられたものの、いくつかの課題も存在している。具体的には「直接的話し方スキル」、「間接的話し方スキル」、「アクションの活用」である。ここでいう直接的話し方スキルとは、「基本要素の底上げ」、「声の大きさ」といったものであり、間接的話し方スキルとは、「言葉詰まりと不自然な行動」、アクションの活

用については、「アクションの少なさ」をさす。まず、直接的話し方スキルと間接的話し方スキルについてである。これらの要素は、これまでの演習で学んできた要素であり、多くの学生が実践できていたものである。ただし、2年次のフリートークでは、これらの要素を実践できない学生が増えるようになる。これは、「はじめてのスタイルへの戸惑いと緊張」が原因であると考えられる。1年次にもフリートークは実施しているが、そのときのルールは「発表時間は3分、小道具あり」というものであった。これに対し、2年次のフリートークのルールは、「発表時間は5分、小道具はなし、スクリーンをみない」というものであり、発表者にとって、より厳しいものに変更されている。そのため、学生の戸惑いは大きく、緊張感も高まるため、それらの要素がパフォーマンスに影響を与えていると考えられる。

次に、アクションの活用である。フリートークでは、アクションを活用している学生もいるが、その割合は低い傾向にある。これについても、前述したようにフリートークのルールが発表者にとってより厳しいものに変更されているため、それがアクションの少なさにつながっていると考えられる。アクションの活用は、演習を通して多くの学生が徐々に実践できるようになるスキルである。これは、多くの学生がアクションを「ある程度自分の言葉で話せるようになった後の『プラスアルファ』的なスキル」ととらえており、実践できるまでに時間を要することになるためである。そのため、このスキルについては意識すればすぐに身につくようなものではない。このように、アクションの活用に関しては実践できるようになるまでに時間がかかるため、全体的にスキルの習得度合いが低くなると考えられる。これらのことから、フリートークのルール変更やアクションへの意識度合いが学生のアクションの活用度合いに大きな影響を与えているとみることができる。

4.4.2 質疑応答の成果と課題についての整理

質疑応答の成果としては「フロアに対するリアクション」、「アクションの活用」がある。質疑応答での「フロアに対するリアクション」とは、フロアから質問が投げかけられたときに、あいづちや小さなうなずきなどの行為のことである。1年次においても、一部の学生はこれらのリアクションを取ること

はできていたが、「不自然にみえる」ものであることが多かった。1年次の段階では、発表者はプレゼンの経験が少なく、自分の研究についても調べはじめる時期である。そのため、多くの学生は発表や質疑応答をこなすことで精一杯になる。このような状況であるため、質疑応答においても大半の学生は「フロアからの質問に答える」ことに集中している。これらのことから、発表者は「フロアからの質問に答える」ことはできても、「プラスアルファの答え方」を実践することは難しいといえる。これに対し、2年次では、多くの学生が自然なリアクションを取ることができるようになる。これは、これまでの演習での経験を通して人前で話す経験を重ねたり、自分の研究を理解しはじめることで、さまざまな面で余裕がうまれるようになるためである。このように、発表者に余裕が生まれ、フロアに対して適切にリアクションを取ることができるようになると、言葉以外の部分においても発表者とフロアとのコミュニケーションが円滑になされるようになる。

また、質疑応答ではフリートークのときとは異なり、多くの学生がアクションを活用できるようになる。フリートークでは発表がメインになるため、アクションを活用する余裕のある学生は少ない。これは、事前に大まかな話の流れをつくり、それに沿って話すことになるため、発表者は「自分のシナリオ通りに話す」ことに集中するようになるためである。これに対し、質疑応答では発表者はフロアからの質問に答えることに集中すればよい。その際、発表者は自分の言葉で回答すればよいので、話の自由度は高くなり、アクションにまで意識を向けやすくなる¹⁰⁾。このように、質疑応答にアクションを活用できるようになると、「言葉に気持ちなどの感情を込めやすくなる」ため、フロアに発表者の熱量が届きやすくなる。そうなると、フロアの側も「自分の質問を受け止めてくれている」と感じることができるようになり、両者の間によい空気が生まれやすくなる。このような空気が形成されれば、質問をしやすい状況になるため、質問内容がよいものになり、発表者とフロアとのコミュニケーションも円滑になされるようになる。このように、2年次のフリートークでは、多くの学生が質疑応答においてアクションを活用できるようになるため、1年次のときよりも実のあるものになるといえる。

一方、質疑応答の課題としては「語尾の表現方

法」がある。質疑応答のときには、多くの学生が語尾の「堅さと強さ」、「伸び」などの点で課題がみられる。語尾については、1年次のときから課題がみられており、改善が難しいものである。これは、それぞれの学生の「話し方」のクセが強くなる要素でもあるため、改善に時間がかかるためである。話し方に注意していても、語尾の部分にまで意識を向けることは難しい。ただし、この語尾の表現次第で、フロアの印象を変えることもできるため、重要なスキルであるといえる。語尾の「堅さと強さ」とは、はっきりと言い切ってしまう程度が強いことをさす。いうまでもなく、強調したい場面など「はっきりという必要がある」ところについてはそのように表現することが重要になる。ただし、発言全体を通して「はっきりと言い切る」というイメージを強くだしすぎてしまうと、「言葉の堅さや強さ」を過度に表現することにつながる可能性があるため、多少は穏やかな要素も入れていくことも必要になる。次に、語尾の「伸び」である。語尾を伸ばすと、フロアからは「だらけていたり、緊張感が欠けている」と思われる危険性がある。そのため、語尾の「伸び」についても可能な範囲で自然なレベルに収めておく方がよい。ただし、これについては難しい質問が投げかけられ、少しでも考える時間を捻出したいときなどは、意図的に伸ばすことも有効な手段になる。そのため、語尾の伸びの程度については、それぞれの学生が「フロアに不自然に思われない程度に」臨機応変に変化させていくことが必要になる。

4.4.3 共通事項の成果と課題についての整理

共通事項の成果としては「笑顔のメリハリ」がある。2年次に入ると、笑顔をつくることのできる学生が増えてくる。これは、これまでの演習での経験や、自分自身の研究への理解が深まるという理由によるものだけではない。笑顔のつくり方については、自分以外の学生が発表や質疑応答のときに「笑顔」をみせていることも大きな影響を与えている。多くの学生は、他者の発表や質疑応答のときにおける笑顔をみて、第三者的な視点からそれが重要であることを直に感じるようになる。そのため、2年次に入ると、徐々に発表や質疑応答のときに笑顔みせる学生が増えていく。さらに、2年次の後期では、この笑顔をみせるタイミングにまで気を配れるようになっていく。学生は、「自分の発表の最後」、

「質疑応答でフロアからの質問に答えた後」にみせることが多い。前者については、自分の発表が終了したことを暗にフロアに示すためのものである。発表の最後に笑顔を見せることで、フロアによい印象を抱いてもらいやすくなる。後者については、フロアからの質問が1つか複数であるかで笑顔を見せるタイミングが異なる場合がある。質問が1つの場合は、その質問に答えたあとに笑顔を見せればよいが、複数である場合は、最後の質問に答えたあとにみせる学生が多い。その際、注意しておかなければならないのは、フロアの方も最初に質問の数を発表者に伝えておくということである。これにより、発表者の方も適切なタイミングで笑顔を見せることができるようになる。本演習では、複数の質問がある場合、事前に質問数を発表者に伝える学生が多くみられる傾向にある。

また、共通事項の課題としては「フロアに対する言葉のフォロー」がある。2年次に入ると、フロアからの質問に対し、自然な形であいづちやリアクションを取ることができる学生が増えてくる。それに加え、重要になるのがフロアに対し適切な声かけをするというものである。これは、フロアが質問をする際に「何を言えばよいかわからない」状態に陥ったときに、発表者側が適切な声かけをするということである。具体的には、相手を落ち着かせるような発言をしたり、(質問の内容を)相手と一緒に考えようという意思を示すような発言をしたりすることである。前者は、フロアが何を質問してよいかわからなくなってしまったときの対処法である。後者は、フロアが質問内容を整理しきれていないときの対処法である。質疑応答の際、発表者がフロアに対してこのような配慮ができるようになると、フロアの側も安心して伸び伸びと質問を投げかけやすくなる。ただし、このような声かけは、フロアの側に立った行動であるため、発表者が実践することは難しい。事実、本演習においても、実践できる学生は少数である。そのため、このスキルについては、今後、さまざまな経験を通して少しずつ身につけていければよいものであると考えられる。

5. おわりに

ここでは、2年次後期の専門演習で実施するフリートークの成果と課題について、差別化戦略の概念を用いて検討する。遠藤(2011)は、競争環境

下において、企業は顧客に「選ばれる価値」¹⁷⁾をうみださなければならないと述べている。ここでいう「選ばれる価値」とは、「差別化された価値」のことであり、競争相手にとって模倣困難で持続性の長いものであることが重要になる¹⁸⁾。本研究では、差別化戦略を「専門演習でフリートークを経験することで、学生が自分の特性をいかして『人前で自分の思いや考えを適切に伝える』スキルを習得し、それぞれの進路に役立てること」としている。ここでいう差別化とは「学生が自分の特性をいかした伝え方を実践すること」であり、フリートークを通して、多くの学生は自分なりの話し方をみつけていくようになる。本研究では、学生がフリートークを経験するなかで明らかになった成果と課題について整理し、具体的な内容について述べた。その結果、得られた知見は次の通りである。

まず、フリートークそのものについては一貫した傾向やパターンはそれほどみられないということである。たとえば、直接的話し方スキルについては、しっかりと滑らかに話すことができる一方、声が小さいなどの課題がみられる。また、間接的話し方スキルについても表情や空気感は一定レベルの表現ができてはいるものの、不自然な動きをするときがあるなど、同じ枠組みに入るスキルにおいても成果と課題の両方が混在しているといえる。これは、学生の「得意・不得意」などの特性がフリートークに大きく影響しているため、全体として一貫した傾向やパターンがそれほどみられなくなっていると考えられる。

次に、質疑応答や共通事項については、言葉を発するかそうでないかで学生のスキル習得に差が生まれやすくなるということである。言葉を発するスキル、たとえば語尾の表現やフロアに対する言葉のフォロー¹⁹⁾などについては、習得が難しい傾向にある。これに対し、言葉を発しないスキル、たとえばフロアに対するリアクションやアクション、笑顔のメリハリなどについては、比較的習得がしやすい傾向にある。これは、学生にとって「人前で言葉を発する」という行為そのものがハードルの高いものであると考えられる。これに対し、言葉を発しない行為については、学生にとってそこまで習得が難しいスキルではないと考えられる。

本研究では、専門演習で実施するフリートークの成果と課題について、差別化戦略の概念を用いて検

討してきたが、フリートークそのものについての詳細な検討がなされているわけではない。そのため、今後はフリートークそのものについて、より詳細に検討する必要があると考えられるが、これについては今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿では、特に断りがない限り「演習科目」や「専門基礎演習」、「専門演習」については、筆者が担当している科目のみをさしている。
- 2) 野村総合研究所(2004:14)。
- 3) Porter(1980=1995:59)。また、森は差別化戦略を「業界において競合他社との間で製品やサービス、イメージ等の差別化を図り、特異性を出すことを目的とした戦略」(森, 2015:140)、加藤は「競合企業にはない独自の特性を有する製品やサービスを提供することで、その特性を好む顧客から高く評価されることを狙う方策」であると述べている(加藤, 2014:27)。
- 4) 本稿では、スクリーンの使用をパワーポイントを活用しているという前提でとらえている。そのため、ここでは「スクリーン」に表記を統一している。
- 5) 1年次後期の専門基礎演習では、個人発表としてフリートークや研究発表を実施している。
- 6) 森は「自分の言葉で話す」ことの重要性について述べている(森, 2007:90-1)。
- 7) それ以外に、事前に予測していない質問に対するトレーニングについては、学生から教員にリクエストがあった場合に個別に対応している。
- 8) ここでいうアクションとは、身振り手振りなどの動きのことをさす。
- 9) これは、この時期になると多くの学生は「自分なりの話し方」をある程度確立しているため、選択する話し方が「新しいものにチャレンジする」というものよりも「これまでの経験のなかで自分に最も適していると思われる話し方」になる傾向が強くみられることなどが理由として挙げられる。
- 10) パフォーマンス評価とは「知識やスキルを活用・応用・総合する力をみるために、学習の成果物やそれに関わる活動を評価する方法」のこと(京都大学, 2022:13)であり、本稿では、この定義を参考にパフォーマンスを「知識やスキルを学習にどの程度活用できるかという成果を示すもの」ととらえている。
- 11) 語尾の表現方法に関する課題については、発表のときにもみられるが、質疑応答のときにもみられることが多いため、ここで記述している。
- 12) 1年次では、感想と質問のいずれかを、2年次では主に質問をするように勧めている。これには、発言者だけでなく、フロア全体の質疑応答に関わるスキルをレベルアップするというねらいがある。ただし、感想という選択肢そのものをなくしてしまうことは、必要以上にフロアの学生にプレッシャーを与えてしまう可能性があるため、ここでは学生に「質問をするように『勧める』」としている。
- 13) 当然のことではあるが、質問が1つの場合であっても、フロアは発表者に対して「1点質問させてください」などと伝えることは重要である。
- 14) ただし、後述するように、このようなスキルはレベルが高いものであると考えられる。そのため、学生には将来的にさまざまな経験を重ねるなかで、少しずつ身につけていけばよいものであるととらえている。
- 15) ここでは2つのパターンを提示しているが、実際にはそれ以外のパターンも考えられる点には注意が必要である。
- 16) なお、「アクションの活用」についても、1年次後期の専門基礎演習での経験がプラスの方向に働いている点には注意が必要である。
- 17) 遠藤(2011:23)。
- 18) 遠藤(2011:23-4)。
- 19) ただし、フロアに対する言葉のフォローについては、本文で述べているように「プラスアルファ」的な要素であるため、学生にとってはハードルが高いものであり、この点については注意が必要である。

参考文献

- 青島矢一・加藤俊彦, 2012, 『競争戦略論 第2版』東洋経済新報社。
- 遠藤功, 2011, 『経営戦略の教科書』光文社。
- 加藤俊彦, 2014, 『競争戦略』日本経済新聞出版社。
- 京都大学, 2022, 『令和5年度 京都大学特色入試学生募集要項』(https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/admissions_tokusyokustudent_recruitment_documents2023-application-guidelines-3d957ec7e7712abc04b750a363bc48d6.pdf, 2022年10月29日閲覧)。

- 野村総合研究所編著, 2004, 『経営用語の基礎知識 第2版』ダイヤモンド社。
- Porter, Michael E., *Competitive Strategy*, The Free Press, 1980. (=1995, 土岐坤・中辻萬治・服部照夫訳『新訂 競争の戦略』ダイヤモンド社)。
- 村本由紀子, 2003, 「口頭発表・当日のポイント」田中共子編『よくわかる学びの技法』ミネルヴァ書房, pp.98-101。
- 森宗一, 2015, 「業界の構造分析」井上善海・大杉奉代・森宗一著『経営戦略入門』中央経済社, pp.127-36。
- 森靖雄, 2007, 『新版 大学生の学習テクニック』大月書店。